

〔論文〕

小学校における体育と道徳の合科的な学習の事例提案

一次期学習指導要領におけるカリキュラム・マネジメントの考え方に沿って—

俵 谷 好 一
Koichi Hyotani

大阪総合保育大学
児童保育学部

藤 田 善 正
Yoshimasa Fujita

大阪総合保育大学
児童保育学部

西 岡 毅
Tsuyoshi Nishioka

大阪教育大学附属池田小学校

弘 田 陽 介
Yosuke Hirota

福山市立大学大学院
教育学研究科

2017年に告示された学習指導要領によって、各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントが導入された。そして、学校教育の改善・充実および評価のサイクルの実質化が各学校に求められるようになった。本稿では、この新しい流れを受けて、具体的な単元計画を提出し、体育と道徳の合科的な学習による身体と心をつなぐ二事例を提案したい。一つ目の事例である集団でのボールゲームでは、チームワークや他者への配慮を学ぶような道徳教材を組み入れて、個々の児童の立場や個性に応じた思考と技術が学べる単元計画を私たちは考えた。また二つ目には、私たちは個人の体操技術の向上のために、他の児童との対話が必要になるような設定と読み物を用意する。実技を行う児童と運動観察者の児童は、それぞれの運動についての工夫を考えるが、その際にどのように伝えるかというコミュニケーションの問題も含まれている。この二つの事例を通して、私たちは教科としての体育と道徳をつなぎ、その二つの教科の特性から複眼的に考え、対話するような授業実践（対話の実践）を構想する。このように、今日のカリキュラム・マネジメントの議論の文脈から、この事例を捉えなおし、より深い子どもたちの学びを促進するような提案をし、対話による心身のつながる実践を生み出していくことを本稿の目的としたい。

キーワード：学習指導要領、カリキュラム・マネジメント、体育と道徳の合科的な学習、対話の実践、運動観察者

I はじめに

1 本稿の背景と目的

平成29(2017)年3月31日、文部科学省は、学習指導要領を改訂し、平成32(2020)年4月1日から施行することを告示した*1。そこでは、教育基本法や学校教育法が目指す普遍的な教育の根幹を踏まえ、グローバル化の進展や人工知能(AI)の飛躍的な進化など、社会の加速度的な変化を受け止め、将来の予測が難しい社会の中でも、伝統や文化に立脚した広い視野をもち、志高く未来を創り出していくために必要な資質・能力を子どもたち一人一人に確実に育む学校教育の実現が目指されている。

その中でも、特に重視されている考え方は、次の三つである。

①「主体的・対話的で深い学び」

②「各教科等の特質に応じた見方や考え方」

③「各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメント」

今回の学習指導要領の改訂は、従来の学習指導要領の中心であった「何を学ぶか」に加えて、「どのように学ぶのか」「何ができるようになるか」といった視点で見直すことを求めている。その視点から学習指導要領の要であり、教育課程に関する基本原則を示す「総則」を抜本的に改善し、必要な事項をわかりやすく整理している。また、改訂をめぐる議論で話題となった「アクティブ・ラーニング」という多義的で、概念が成熟していない言葉は、法令には不向きであるとしてあえて使わず、「主体的・対話的で深い学び」という表現になった。

「見方や考え方」は、これまで社会科等いくつかの教科で重視されてきた概念であるが、知識・技能を構造化して身につけていくために不可欠であり、「見方や考え

方」が成長することにより、思考力・判断力・表現力が豊かなものとなり、より広い領域や複雑な事象をもとに思考・判断・表現できる力として育成されていくとして重視されている。

また、今回の改訂は、こうした新しい総則を手掛かりに、前回改訂の答申でも提言された、各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実施を促進し、学校教育の改善・充実の好循環を実現することを目指している。我が国の教育課程は、各教科と、特別活動や総合的な学習といった教科横断的な視点で学びを深める領域とで構成されているが、こうした教科と領域における教育双方の強みやよさを生かしつつ、教育課程総体の力を発揮させて資質・能力を育成できるよう、各学校における「カリキュラム・マネジメント」を促進することを目指した。

本稿執筆者のグループは、小学校教員の経験を長くもつ者を主として構成されている。執筆者たちは、上に書いたような現在の教育改革の動向、特にカリキュラム・マネジメントの概念を踏まえた上で、自身の実践経験に鑑み、よりよい体育と道徳の融合的な授業実践を提案することを本稿の目的としている。なお、各章の責任分担は以下の通りである。ただし各章の分担は便宜的なものであり、実際には継続的な議論の下で各人の見解を織り合わせて本稿はつくられている。

I	はじめに	弘田 陽介
II	体育と道徳の合科的な学習の事例	西岡 毅、藤田 善正
III	まとめと今後の展望	俵谷 好一

2 カリキュラム・マネジメント

さて、ここでのテーマとなるカリキュラム・マネジメントとは、中央教育審議会の教育課程企画特別部会の委員を務めた高木展郎によると、次のような考え方に沿って、各学校において執り行われるものである。各学校は、学習指導要領をもとに、自校の教育目標や子どもの実態、地域の実情を踏まえて、学校全体で教育課程（カリキュラム）を編成する。これまでのカリキュラムは、国語や算数など教科の学習内容の編成が中心であった。しかし、今回改訂の学習指導要領以降は、全教科で、教科の学習内容とともに、どのような資質・能力を育むのかも含めたカリキュラムを作成しなくてはならない。また、それをもとに授業を行い、成果を評価し、カリキュラムの再構成や授業改善につなげることで新たな教育を築くことも必要になる。このような、各授業教科内容のみならず、育まれるべき資質・能力に応じて、教育課程の再構成や

その改善サイクルをも含める包括的な概念が、カリキュラム・マネジメントとして定式化され、学習指導要領改訂の大きな特色をなしている*2。

また、文部科学省中央教育審議会教育課程部会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（平成28年12月）において、「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」と述べられている。ここで新しいのは、これまでのように、それぞれの教科を分断的に捉えるのではなく、「教科等横断的な視点」をもち、「目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく」という文言である。従来の学習指導要領でも平成10（1998）年の学習指導要領の改訂で開設された「総合的な学習」の時間のように、教科を越えて、教科外活動のみならず学校外の教育的活動をも含めて統合的に組織しようとする総合的な学習も小学校教育に組み込まれている*3。

また、平成20（2008）年度に改訂された現行の学習指導要領でも、もちろん「合科的・関連的な指導」を進めることが推奨されている。しかし、今回の改訂でカリキュラム・マネジメントという形で提示されていることから、従来の提示を越えるものが期待されていると思われる。それは次期学習指導要領改訂の方向性でも示されていたような「学びを人生や社会に生かそうとしながら、未知の状況にも対応することを可能にする教育課程」を作るという基本姿勢の根幹にあるものである*4。つまり、合科的指導は、その枠として設けられた総合的な学習の時間にとどまらず、教育課程全体を学校目標で設定される必要な学びという観点からチェックし、その学びのためには現行の枠組み内で可能な限り、組織的学習内容を配列するというように、より教育課程全体の問題として合科を捉える必要があると考えることができるであろう。

このような各学校におけるカリキュラム・マネジメントは、これまでも教科の合科的扱いで各学校・各担任教諭の判断でなされてきた。例えば、合科は、小学3年生国語の説明文「ダイズのへんしん」の学習と、理科のダイズの栽培や、収穫したダイズを使ったきこ作りのような学校独自のカリキュラムや、教科の発展課題としての総合的な学習、あるいは地域の産業や人物等特色を生かした教育活動等として採り上げられることはあった。今回の改訂では、全国的にこのような合科的な扱いの学習が、各学校の特色を生かしてより強調され、推進されることとなった。

本稿では、これらの最新の改訂を意識して、カリキュラ

ム・マネジメントの実践事例を考案してみたい。いくつかの合科の可能性が考えられるが、本稿の執筆者たちは、体育科の単元の中に、その種目と関連の深い道徳の教材を指導する道徳科を適切に位置づけることによって、独自のカリキュラムを作成して指導することは有効であると考えている。なぜ体育と道徳を融合的に考えるのかの理由については、次の節で論じることとする。

なお本稿で用いる融合という言葉は、新しい小学校学習指導要領の第1章総則における「教科等横断的な視点」、「合科的・関連的指導」と述べられる際の、「横断」、「合科」、「関連」を含みこんだものである。横断とはいくつかの教科を一つのテーマで貫くというイメージがあり、また合科・関連は複数の教科を接点でつなぐというイメージがある。そして、本稿で用いたい融合は、新しい小学校学習指導要領には登場しない言葉であり、またいくぶん、「横断」、「合科」、「関連」よりも踏み込んだ印象をもつ言葉である。だが、本稿は、新しい小学校学習指導要領のその理念をより先にまで推し進める提案であるという願望をもっているため、ここで融合という言葉を用いることにする。

3 体育と道徳の融合

今回の学習指導要領の改訂は大卒の改革に加えて、教科外活動「道徳の時間」を「特別の教科 道徳」として制定することを目玉としている。そもそも、道徳の教科化のきっかけとなったのは、全国各地で続発するいじめ問題であった。その後、いじめ防止のための法律が成立し、いじめの定義も何度も変わってきているが、それ以後も、いじめが原因で自殺に追い込まれる児童・生徒が後を絶たない。東日本大震災の被災地から避難してきた児童生徒が引っ越し先でいじめを受ける事案や、SNSの急速な発達によってネットを使ったいじめが多発するなど、今日でもいじめ問題は深刻な状態にある。

また、翻って、体育という教科を考える上で押さえておかなければならないことの一つとして、学校において、スポーツの「出来不出来」で学級における立場が決まって来る風潮（スクールカースト）が見られるという悩ましい問題がある*5。とりわけ、小学校から高等学校にかけては、学級の中でスポーツができる子どもが優位に立ち、できない子どもは自分に自信がもてなくて消極的になる傾向が見られる。他の教科と比べて、体育の授業では、学級全員の前で運動しなければならないために、一挙手一投足が目に晒される。また、勝ち負けに伴うスポーツでは、勝つことが優越感に、負けることが劣等感や集団から疎外されることにつながる傾向がある。近年では、運動部顧問の体罰による高校生の自殺事例によっ

て、中学校以降の運動部活動における指導の行き過ぎおよび指導配慮の不足が問題になってきている。なんのための運動なのか、なんのための集団でのスポーツ活動なのか、その意義そのものが問われるような時勢になってきている。

このような道徳と体育をめぐる近年の状況に鑑みるならば、例えば、各教科の中でそれぞれの対処法を考案することも、もちろん大切なことであろう。例えば、道徳の中でいじめの問題を多面的・多角的に考え、議論することはもちろん重要である。また、体育における問題を克服するためには、できないことをできるようにする指導の工夫改善と同時に、多様なスポーツに接することで、自分にとって得意な種目を見つける機会を与えることが求められる。

しかし、この道徳と体育は、一般的にはそれぞれの授業時間などで道徳は心を養い、体育では身体を育むという二元論で分けられ得るが、そもそもまったく違う事柄を扱う教科ではないはずである。そうではなく、お互いの教科をお互いに含み合うものである。例えば、チームスポーツを通しては、次のような学びが得られるであろう。誰もが皆得意不得意があることから、自分のよさを知り、人のよさを見るという人間観が育まれる。様々なポジションや役割を経験するとそれぞれの立場の理解もより促進される。さらに、成功を共に喜び、チームメイトの失敗をかばうような心の育成や集団形成が求められる。また道徳では、次期学習指導要領では、「考え、議論する」ことの必要性が強調されている。しかしながら、小学校の道徳において内容項目や理念についての抽象的な議論がなじむはずはない。そうではなく、具体的な学習や生活の場面に即した事例が必要であるが、体育という教科はそのような身体を伴った具体性を文字通り付与するものとなる。いじめといったネガティブな指向を共有するような集団性ではなく、実際の競技や運動によってポジティブな集団性を体感することは、自己効力感や他者受容力を得る大きな手助けとなるであろう。つまり、人間存在において、心と身体は切り分けられる生活の場面もあるが、しかし完全にこれは心の問題、またはこれは身体の問題と分けることが難しいように、道徳と体育を切り離してしまうことにも異議申し立てをすることが可能である。

また、実際の道徳の授業においては、教材が使われるが、その中には、体育やスポーツを描いたものがある。筆者のうちの一人が、入手した道徳の教材を次期学習指導要領における道徳の内容項目別に一覧表にしたが*6、そこには子どもに親しみやすい題材としてスポーツ選手が取り上げられることが多いことが見て取れ

る。

このように考えるならば、体育と道徳とを合科的に指導していくことは、今回のカリキュラム・マネジメント促進の流れの中では、その二つの組み合わせには不自然なところは見られないであろう。おそらく、実際の学校現場では、体育と道徳との合科的指導は多く見られ、今後様々な工夫がなされていくであろう。そして、本稿はその嚆矢となりたいと考えているのである。現行の学習指導要領にも書かれているように「心と体を一体として捉え」の意味において、道徳と体育の合科的な学習の様々な実践が考えられるべきである。ただし、小学校教育の事例として、今日までその二つの教科だけをつなげる事例はあまり多く紹介されていない。近年の学習指導要領の改訂を受けて出版されたカリキュラム・マネジメントなどの事例書を見渡すと、例えば、年間計画において、小学校2年生の生活・国語・音楽・図工・学校行事と体育を、野菜というテーマでつなぎ、野菜栽培や収穫を題材にした身体表現を作るといったものが見つけられる*7。しかしながら、これは学校での学びのすべてを関連させる事例であり、直接、体育と道徳を結び合わせるものではない。また、体育ではなく、職場体験やボランティアなどの体験活動と道徳の結びつきを授業展開しようという構想はすでに描かれているが*8、これも体育および道徳以外の多くの要素を含みもつため、本研究にとっては参考事例にとどまるものであろう。つまり、管見では、体育と道徳とを直接つなげる研究論文は見つけることができていない。なお、文部科学省が全国の小・中学校に作成を求めている「道徳教育全体計画別様」の体育と道徳の内容項目との関係を調べたモデル研究のさきがけとしては、川越市立仙波小学校（2011）*9が挙げられる。そこで、本稿がそのつなげる役割を果たすものと考えている。

また、本稿の執筆者たちは、以下のⅡの体育と道徳の合科的な学習の事例において、体育の指導において道徳とのつながりを考察していくこととする。集団運動であるゲーム領域の中学年のボール運動系のボールゲームや高学年の個人運動の器械運動系の跳び箱運動と道徳の教材を関連付けることによって、児童の技能と他者への意識の変容が期待できると考えた。具体的な事例をⅡで提案していくが、体育と道徳をつなぐ媒介、次期学習指導要領の新たなキーワードである「考え、議論する」について、Ⅲのまとめと今後の展望で検討していくことになる。

Ⅱ 体育と道徳の合科的な学習事例

1 実践への構想

本稿は、体育と道徳のねらいをより達成しやすくするために、体育と道徳の学習を融合するカリキュラムを作成し、体育と道徳の合科的な学習を試みる。

冒頭で体育と道徳の融合の目的について述べたが、さらに現行の小学校学習指導要領における体育科の目標では、「心と体を一体として捉え、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる」と書かれている*10。そこで、本稿において筆者たちは「心と体を一体として捉え」とは、児童の心身ともに健全な発達を促すためには、心と体を一体として捉えた指導がより重要であると考え、道徳と体育を融合した学習、合科的な学習の実践を提案する。

本研究を進めるに当たって、すべての道徳教材を、学習指導要領における道徳の内容項目別に、体育授業の単元の中に組み込むことで児童の意識に変容をもたらすとは限らない。運動種目によっても異なるし、児童の実態によっても異なる。そこで体育授業の運動種目と関連するような教材が有効であると考え、集団運動であるボール運動系ゲーム領域の中学年のボールゲームと道徳教材「さとしの心」を関連付けたり、高学年の個人運動の器械運動領域の跳び箱運動と教材「世界に羽ばたく『航平ノート』」を関連付けたりすることによって、児童の学習に挑む意識の変容が期待できると考えた。

実際の体育と道徳の合科的な学習では、道徳教材「さとしの心」と関連して、集団でのゲーム「あっち、こっち、タッチダウン」の運動をすることを通して、粘り強くやり遂げる、きまりやルールを守る、集団に参加し協力するといった態度、フェアプレーの精神、対戦相手や仲間の尊重のような意識の変容が期待される。

また、道徳教材「世界に羽ばたく『航平ノート』」と関連して、小学校高学年の器械運動領域、跳び箱運動の「頭はね跳び」の運動をすることを通して、積極的に取り組む姿を取り上げ、創意工夫や不断の努力で取り組む姿が美しく、周りの協力もあって楽しい雰囲気になり溢れ、友達と協力し合って学習を進めていく子どもたちの姿が見られることが期待される。

なお、以下の2、3で示す事例は、執筆者の一人が勤務する小学校で実際に行ったものである。ただし、今回、表1、表2で提案するように、体育と道徳を教科として融合させた形で行ったわけではない。したがって、以下の事例は、学習指導要領の改訂におけるカリキュラム・

マネジメントの議論を受けて、執筆者のこれまでの実践を参考事例として組み合わせ、新たに構想するものである。つまり、実践の報告そのものではなく、実践をもとにした提案および想定される限りでの教員の配慮と児童の様子であることをお断りしておきたい。なお、以下、体育場面などの写真は、以前に実際に行われたものの写真であり、今回の提案に対応する箇所があるために掲載している。

2 集団スポーツの例 3学年 ゲーム「あっち、こっち、タッチダウン」

(1) ゴール型ゲーム教材の視点

運動を行っている児童に対して、直接指導を行うという指導スタイルは体育の学習でよく見られるが、この指導スタイルでは、学びの質的向上を目指すのであれば限界があるであろう。もちろん、運動者がどうすれば、できなかったことができるようになるのかを試行錯誤しながら、できるためのポイントを見つけ、自分の身体に問いかけさせることは大切である。

しかし、運動場や体育館の大きさや学級の児童数によっては違いがあるが1時間の授業の中で、どれだけの児童が運動できる時間を保証されているであろうか。集団スポーツであるゴール型ゲームでは、体育館に2面のコートが取れたとしても40人学級の児童がゲームできる時間は限られている。また、ゲームに出場できたとしても運動が得意な児童がボールを独占し、運動が苦手な児童は、一度もボールに触れることなく「運動傍観者」になってしまうことが多いのではなかろうか。

そこで、ボール保持者だけの指導にとどまるのではなく、「運動傍観者」にもスポットを当て授業を進めることで、多くの児童が学ぶ機会の保証ができると考えた。ゴール型ゲームでは、得点を決めた人（ボール保持者）だけが得点した喜びを独占し、得点を決めない人（ボールをもたない人）は、得点をした喜びを実感できないことがある。つまり、自分がいてもいなくても得点が決まる状況では、自分の存在に価値をもつことができず、主体的に運動に取り組んだり、チームの仲間と対話してよい動きを試そうとしたりすることができないのである。しかし、自分の動きが得点につながる重要な役割を果たすことができればチームで得点をした喜びを感じることができ、主体的に学習に取り組むことができると考える。そして、チーム全員に得点に関わる重要な役割があれば、チーム全体で動きの確認をする必要があり、お互いがどのように動けば相手の隙をつくることができるか試行錯誤しながら作戦を立てる（対話する）ことが生まれる。また、チーム全員が得点につながる重要な役割を担って

いることで、運動が苦手な児童は、受動的にアドバイス（対話する）を聞くだけでなく、どのように動けば自分が役割を果たすことができるか能動的にチームの仲間へアドバイス（対話する）をもらうことも生まれ、主体的に運動に取り組む姿が見られると考える。

(2) 教材づくりの視点

① ゲーム教材「あっち、こっち、タッチダウン」

本教材「あっち、こっち、タッチダウン」は、ボールをもって相手の陣地に侵入し、ラインを越えると得点になるフラッグフットボールをもとにしたゲームである*11。フラッグフットボールは、「1回ごとに攻撃が止まり、作戦の見直しや修正ができること」「ボールをもって走ることができること」「接触プレーがなく、相手の左右の腰につけてあるフラッグをとるとボール保持者の侵入をふせげること」などが大きな特徴である。オフェンスは、ボールをもったプレーヤーができるだけ遠くまでボールを運び、ディフェンスは、できるだけ侵入をくい止めることが求められる。ボールをもったプレーヤーが1対1でディフェンスをかわすためには、体をひねったり回転させたりしていろいろな身のこなしが必要となる。また、右に行くと見せて左に行くというように相手の裏をつく動きが求められる。そのことで、タッチダウンまでの道を自ら作り出すことができる。しかし、2対2や3対3とコート内の人数が増えるにつれて1人では状況を打破することはできなくなる。そこで、人数が増えた状態でも、相手の裏をつくプレーが必要となる。ここでは、2人のプレーヤーが協力をして、立ち位置を入れ替えたり、どちらがボールをもっているかわからない状況を作り出したりして相手の裏をつく方法を考えることが大切になる。1人では、状況を打破できないことで、仲間と協力して得点をねらう必然性がある教材である。

また、本教材では、コートを台形にしてスタートするエリアの横の幅は狭く、タッチダウンするエリアの横の幅は広くしている。そのことで前に直線的に走るのではなく、横の広がりを利用して、斜め前を走ることができる。例えば、攻撃をするときにボールをもっていない人がボールをもっているふりをしてコートの右斜め前のスペースに走り込むとディフェンスも右斜め前のスペースに集まる。その間にボールをもっている人は、左斜め前のスペースに自分の走るゴールを見つけ5点ゾーンまでたどり着くことができる。つまり、コートを台形にすることで、相手がいらないスペースを有効に使おうと思いが働き、サイドのスペースを意識することができる。

以上のことからボールをもたない人もゴールにつながる動き方を学ぶことができ、みんなが活躍することがで

きる。また、常にボールをもたない人がボールをもっている人にどのようなサポートしていくかを考え、自らゲームを作っていくボール運動の面白さを子どもたちは味わうことができる教材（図1）である。

② 道徳教材「さとしの心」（文溪堂 3年生）＊12

本主題は、「友達と助け合って友情を深める」という内容項目B 友情、信頼の価値を主にねらうものである。

中学年になると交友関係が広がり、集団で行動することが多くなる。そのことで仲間意識が強くなり、中学年の年代では、ギャングエイジと言われる時期になる。友達と仲良く学校生活を過ごす反面、好き嫌いで交友関係を限定し、仲間外れが見られることもある。学校では、いじめや仲間外れを口頭ではだめだと注意することもあがるが、個々人の個性を大切に相手を受容する心を育てることが大切になる。友達のよいところを探して認めてあげたり、苦手なところは、温かく励ましたりすることが大切になる。そして、友達に認められてうれしかったことや困っているときに励まされてうれしかったことなど、日常の中で友情を深めていくことが大切と考え、本主題を設定した。

本教材「さとしの心」は、さとしの心の変容が書かれた教材である。さとしは、体育の授業で練習試合をしていたが、さとしのチームには運動の苦手なかずやがいた。今日も試合に負けてしまい、「もうこんなチームで試合なんかやられてられない」と、さとしは腹を立てていた。しかし、ある放課後に、一人で黙々と練習するかずやの姿を見て、さとしは、一緒に練習を始める。パスの出し方や受け方などの練習をしているうちにチームの仲間も参加するようになってきた。そして、かずやもだんだんと技能が上達してきた。次の体育の授業でさとしのチームは負けてしまったが、さとしは、前回とは違った気持ちになっていた。負けても楽しく感じられた。苦手なことは温かく励まし合い助け合っていくことが大切であると

考えさせられる教材である。

(3) 指導に当たって

本単元では、ボール保持者がスタートゾーンから5点ゾーンまでの道を自ら切り開くことからスタートする。まず、1人対1人の状況で自らがディフェンスをかわすためにどのような動きが必要なのかを考えさせ、共有させていく。そのときにまっすぐ走るのではなくフラッグを取られないために急に止まったり、体をひねったり、回転したりしながら身のこなしを意識させる。

また、どのような動きがフラッグをとられない動きなのかを実際に動きながらチームで考えたり、「しっぽ取りゲーム」（図2）などで身のこなしを試しながら確かめたりする。

しかし、1人対1人のゲームを何度もすることで、ディフェンス力が高まり、身のこなしだけでは太刀打ちできない状況に直面する。そこで、オフェンスの人数を1人増やすことにし、2人で相手をかかわすためにどのようにすればいいかという課題を設定する。そして、2人対1人のゲーム（図3）で相手の裏をつく動きを考えさせる。

2人対1人のゲームは、個人の技能だけでなく、ボールをもっているふり（図3）をしてディフェンスをボール保持者から離れさせたり、ボールをもっている人にディフェンスを近づけないようにボールをもっていない人がその間に入ってブロックしたりして仲間と協力することで高得点がねらいやすくなる。つまり、運動が得意でない児童でも仲間と協力することで、誰もが得点することができる。しかし、運動が得意な児童にとっては、個人の技能だけでも得点をねらうことができるので、ワンマンプレーで得点をとる児童もいる。そのようなチームでは、運動が得意な児童が自己中心的にプレーをして、運動が苦手な児童はゲームに参加できないことがある。

そこで、体育の単元内のこのときに道徳の授業で「さとしの心」を取り上げることが、より効果的であると考え

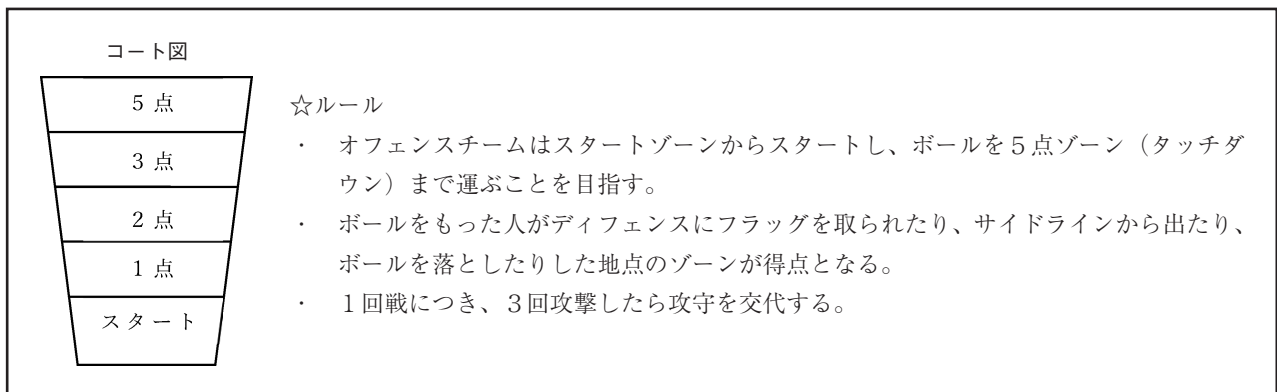


図1



➤ 「しっぽ取りゲーム」
先攻・後攻を決め、腰につけたフラッグを取る。逃げる方は、個人技能としてどのように逃げれば相手にフラッグを取られないかを考える。

図2



➤ 「2対1のランゲーム」
攻めチームは、ゴールを目指して走り、守りチームは、ボールをもっている人がゴールにたどり着く前に腰につけているフラッグを取れば勝ちとする。ゴールまでたどり着けるかをいろいろな作戦を考え挑戦することで、作戦を考える楽しさや協力する良さを実感させる。

図3

る。なお、道徳の授業展開は、*13に示した。また、以上述べてきたようなことを考慮して考えた単元計画（3年 あっちこっちタッチダウン）は、表1（別添）のようである。

このように道徳教材「さとしの心」は、単にチームワークが大切という読み物のレベルではなく、実際にチームスポーツの技術論として、子どもたちの中に生きていくのではないかと想定される。もちろん、道徳教材は実際の行動を直接に喚起するものではないということは従来からも議論されている。しかしながら、体育のゲームでチームプレーを行うかどうかは二律背反の問題ではなく、集団スポーツにおいては戦略上行われる必要があるものである。道徳の思想の歴史において勝利のために必要な協力は、道徳の内容項目である友情、信頼とは違って、功利主義的なものであると教育内容として退けられるものかもしれない。しかし、このようなチームプレーを入口に道徳教材の「さとしの心」に戻り、その友情を扱った教材から再度具体的な体育の授業に戻ることは、さらなる深さを想定した道徳の授業や体育の授業にとっても重要なことであろう。このように、道徳の内容項目が具体的に体育の技術の中で認められることはもっと奨励されてもよいことであると思われる。そのような考えから、

この節においては、集団スポーツと道徳の読み物教材の融合について構想した。

体育と道徳の授業を融合することによる学習効果は、主として、意欲・態度の面に現れるものと考えられる。ゲームのような勝ち負けを伴う集団スポーツにおいては、練習試合の段階で負けることで、チーム内に不満が生じやすい。体育の単元内のそのようなところに、「さとしの心」のような道徳教材を採り入れることによって、チームワークだけでなく、運動技術的なことにも目を向けさせることが可能となる。

3 個人スポーツの例 第6学年 器械運動 跳び箱 「頭はね跳び」

(1) 跳び箱教材の視点

跳び箱運動は、動きがリズムカルで楽しく、運動者が大きな障害を飛び越えたという達成感が味わえる教材である。また、難しそうな技や自分にはできない技に挑戦し、上手になっていくという技能の向上の実感を味わうことができる。しかし、跳び箱運動は、運動者の限界に挑戦していくことで主体的に学習に取り組めることができる一方、授業の中で体育館に跳び箱を6台設置しても40人学級では、34人が「運動待機者」になり、一人一人

に学習する時間を保証することは難しい。

そこで、「運動待機者」にもスポットを当て指導を進めることで、多くの児童が学ぶ機会の保証ができると考えた。個人スポーツである跳び箱運動などでは、運動者と「運動観察者」で一つのグループをつくり、運動に取り組ませた。「運動観察者」は、常に運動者の補助に入り、お互いの動きを見合うことで、質的向上を図った。そのことで、実際に運動をしなくても仲間が課題をクリアしたときの喜びを共に感じられる。そして、「運動観察者」が仲間に課題を達成させるためにどのようなアドバイス（対話する）をすればいいか考え、運動が得意、苦手に関わらず、主体的に学習することができる。また、1人で技に挑戦していれば、できなくて諦めてしまうところを仲間が関わり合うことで励ましの言葉や補助があることにより不安が拭われ、自分の目標に向かって挑戦し続けられる。また、技ができたときの喜びは、周りでサポートしてくれる仲間と一緒に喜んでくれることで倍増し、一人で課題が達成した喜びよりも一層大きく感じられることができる。

（2）教材づくりの視点

① 跳び箱運動教材 「頭はね跳び」

跳び箱運動の動きを細分化して見てみると、《助走⇒予備踏み切り⇒踏み切り⇒第1空中局面⇒着手⇒第2空中局面⇒着地》という異なる七つの動きの組み合わせが、一連の流れの連続によって一つの動きのまとまりを形成している。これら一つ一つの動きはバラバラではなく、前の運動の終わりが次の運動の始まりへと動きを重ねることでつながっているの、一つ一つの動きができていても、動きをつなげる（融合する）ことができなければ、技ができるようにはならない。

跳び箱運動は、助走から着地までたくさんの動きを融合させることが必要であるが、頭はね跳びでは、既習の台上前転を発展させることから授業をスタートすることで、共通した動きは大切にしながら、第2空中局面、すなわち跳ねる動きに焦点化して授業を進めることが可能であると考え。理想的な動きの姿に自分を近づけていくには、今やっている動きの感覚でよいのか、自分の動き方を認識し、評価・修正していくサイクルが授業において重要になる。自分の身体を動かしている感覚を捉えることができるという動感能力の高まりが、できない、できなつもりを減らし、どの子にもできたという達成感を保証することにつながる*14。

② 道徳教材 「世界に羽ばたく『航平ノート』」(学研 6年生) *15

本主題は、「より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する」という内容項目A 希望と勇気、努力と強い意志の価値を主にねらうものである。

高学年になると高い理想を追い求めるようになり、誰かの生き方に対して憧れをもったり、自分の夢や希望が膨らんだりする。一方、夢と現実との違いを意識することもあり、自分の夢や希望に自信がもてなくなってしまうこともある。このような時期であるからこそ、様々な人物の生き方に触れ、くじけずに理想に向かって前進していく強い意志を育てていくことが大切である。そして、将来、壁にぶつかっても夢に向かって粘り強く取り組み自己実現に向けて努力を継続していく態度を養いたいと考え、本主題を設定した。

本教材「世界に羽ばたく『航平ノート』」は、目標達成に向けて強い意志をもって実行する意義を考えさせることをねらった教材である。ロンドンオリンピックの体操競技、個人総合で金メダルを獲得した内村航平選手が理想の演技を習得するために根気よく努力を続ける姿を中心に描かれている。また、内村航平選手の幼少期のことが書かれており、身近に感じながら読み進めることができる教材である。表紙に「じゆうノート」と記されたノートに、自分が挑戦したい技を書いており、自らがイメージした技を実現するために現状に満足せず高度な技に挑み続ける内村航平選手の諦めない強い心について考えさせられる教材である。

（3）指導に当たって

本単元では、動感意識能力に着目し、授業を行う。跳ねる動作における動感意識は、体を動かしたときの感じ、すなわち感覚による主観的な動感意識と、補助をし合うことで得られる客観的な動感意識に分けられる。主観的な動感意識を中心にした授業展開では、自分の体がどのようになっているかわからず、できなつもりになって終わってしまうことも少なくない。そこで、運動者1人につき2人の補助者「運動観察者」を置き、客観的な視点を取り入れ、動きの感じを仲間とともにこつを見つけさせることで自分が技を行うときにも技の完成度が高くなる。また、技ができようになるためには、すぐに難しい技に挑戦するのではなく、段階を踏んで学習しなければならない。段階を踏むことで技に対して挑戦意欲が湧き、意欲的に運動ができるようになる。単元の初めには、既習の台上前転から行い、助走から着手までの局面まで動きを復習させる。どんなことに気をつければ、安定した台上前転ができるかをワークシートにできるだけ

書かせて一連の動きの中で、細かいところまで意識できるようにする。また、客観的な視点から運動者をみて気づいたことを話し合い、コツを運動者に伝えることで自らの学びの深まりを得ることができる。また、跳び箱に恐怖を感じている児童に対しては、マットを5枚程度重ねて跳び箱1段分と同じ高さにして、横に落ちる心配をなくし、技に挑戦できるようにする。そして、一番上にあるマットにラインテープを貼ることでまっすぐ回れているかを補助者が客観的な視点から判断し伝えられるようにする。まっすぐ回れているか自分自身ではわからないものを補助者がコツをアドバイスすることで、協働的に学習を進めることができる。

次に着手から着地までの局面をマットの上で練習させる。頭はね跳びができるようになるための段階としてここでは、三点倒立からのブリッジ（図4）に取り組ませる。初めは、体が丸まり倒立前転のようにになっている。何度か練習することで、すぐに習得する児童もいるが、できない児童の中には、すぐに諦めてしまう児童もいる。

そこで、道徳の授業で「世界に羽ばたく『航平ノート』」を取り上げることにする。内村航平選手が小学生の頃、結果が悪くても体操をやり続けられた理由として、周囲の励ましと自分の意志の両面があったことを捉えさせる。また、内村航平選手が金メダリストとして登り詰めたのはどうしてかをそれぞれで考えると同時に、これからの自分の行動に生かせることがないか考えさせる。授業展開は、*16に示した。

道徳の授業後、「補助者」は、具体的にどの時点でためをつくって素早い足の振りをするのかを積極的にアドバイスするようになり、仲間を励ます声が増える。そして、三点倒立から体を反ってブリッジができるように運動者の腰を補助者がもち上げ、体を反るタイミングをつかませようとする。手の押し放しについてもタイミングよくしないと効果が見えないので、補助者が客観的視点からどうすればできるようになるかを考え仲間とともに話し合う場面が見られる。また、運動者も励ましの言葉

から積極的に運動に取り組み、技ができるようになるまで繰り返し練習する姿が見られる。

マットの上で三点倒立からのブリッジができるようになるとステージの上で三点倒立して、はねる感覚をつかませる。（図5）ステージでの練習では、三点倒立からのブリッジと同様に補助者がタイミングよく腰をもち上げることで、運動者が体を反ることに意識できるようになる。跳ねる動作ができたかを補助者が運動者に伝えることで、運動者はどこができていなかったかを補助者に聞き、共に学び合いながら技能を高めさせることができる。

単元の後半からは、助走から着地まで別々に学習したことを一連の流れでできるように挑戦させる。一人一人が頭はね跳びの動きを高めていけるように動きのポイントに応じた様々な場を用意して自らの課題に応じて場を選択して練習できるようにさせる。このときも3人1組で運動者と補助者がお互いの動きを見合いながらアドバイス（対話する）ができるようにする。

頭はね跳びの場としては以下の通りである。

- ① マットの上で三点倒立からブリッジをする。ここでは、体を反らす感覚をつかませる。
- ② 二つ折りになったセーフティーマットにマットを乗せて、その上から三点倒立して着地する。ここでは、体を反らせる感覚をつかませる。
- ③ 跳び箱5段を横に連結させ、マットを上に乗せて、頭はね跳びをさせる。ここでは、しっかり手で体を支える感覚をつかませる。
- ④ 跳び箱5段の先にゴム紐を伸ばし、そこに当たらないよう頭はね跳びをさせる。ここでは、ゴム紐に当たらないように体を反る感覚をつかませる。
- ⑤ 跳び箱6段補助有りて頭はね跳びをさせる。ここは、最終的なゴールとして設定する。

以上述べてきたようなことを考慮して考えた単元計画（6年 首はね跳び）は、表2（別添）のようである。

このようにそれぞれの課題に応じて場を選択して練習



図4



図5

することで、自らが課題に対して挑戦することができる。

本節では、1人で行う跳び箱運動やマット運動を、道徳教材「世界に羽ばたく『航平ノート』」を媒介にして、子どもたちの学び合いの素材へと変容させることを試みている。すでに述べたように、このような子どもたちの学び合い・対話を体育にもち込むことによって、うまくできない子どもにとっては少しでも前進していき、達成感を得させることができるであろうし、うまくできる子どもも運動のその先にあるもの—ここでは運動を通じた人との関わりであったり、自分の運動を反省的に言語化・可視化する試み—へと誘導することができる。道徳の観点からすると、その教材を、内村航平という一人の天才の物語ではなく、子どもたちが自分たちもできるかもしれない一つ一つの努力の事例として、読み替えることが、このような体育と道徳の融合的な授業の効果として考えられるであろう。

跳び箱運動やマット運動では、今できる技からもう一段高い技に挑むときに、つまずいて意欲が低下する傾向が見られる。そこで、単元内のそのような位置に「世界に羽ばたく『航平ノート』」のような努力と工夫によって課題を克服するような教材を位置づけることが効果的であると考えられる。これは、器械運動のような克服が求められるスポーツに適用できる考えである。

このように2、3における事例構想の提案によって、事例の具体性を離れて、どのようなことが一般化され得るであろうか。以下のⅢの「まとめと今後の展望」で再度考えてみることにしたい。

Ⅲ まとめと今後の展望

次期学習指導要領の改訂では、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善と教育課程を構造的に捉えて見直すカリキュラム・マネジメントを両輪にして進めることが21世紀に生きる子どもたちに必要な資質・能力の育成につながると強調されている。すなわち、それは、今日のグローバルで変化の激しい社会では絶えず新しい知識が生まれることから、それらに対応していく力、「学び続ける姿勢、学ぶ力としての資質・能力」の育成が喫緊の課題と言える。

筆者たちは、カリキュラム・マネジメントの考え方に沿った体育と道徳の合科的な学習では、主体的・対話的で深い学びの視点から、子どもたちが「考え、議論する」ことは不可欠であると捉えた。もちろん、「考え、議論する」は道徳授業において新しく脚光を浴びたキーワードであるが、それはそもそも道徳の性質上、考えること

はすべての学年において、議論することは学年が進むにつれて重要な手法であるとともに目的でもある。このように視野を広げて考えるならば、「体育について考え、議論する」ことも体育と道徳の合科的学習のキーワードとみなすことができよう。もちろん、議論する内容が道徳の内容項目と関連しなければならぬのは言うまでもない。

筆者たちは、次期学習指導要領に沿って、体育と道徳の合科的な学習を個人スポーツ、集団スポーツの教材（首はね跳び・あっちこっちタッチダウン）の実践事例を本論で紹介しているが、ここまで思索を深めてきたことによって、体育と道徳の合科的な学習は、共同での学び、もしくは「学びの共同体」の実践であったと考えることができよう。本稿のまとめとして、ここで佐藤学の「学びの共同体」の議論を体育実践に導入した岡野昇たちの論を用いて筆者たちの研究を振り返っておきたい。

岡野らは、「体育における対話的な学びの三つの次元」を次のように述べている。

「対象との対話的实践（文化的実践）においては運動の文化的価値への参加を意味し、運動の中心のおもしろさとして位置づけることができ、文化的に価値の高い経験を組織する状況づくり（主題づくり）が重要になってくる。また、自己との対話的实践（自己内実践）においては、自己の身体との対話を意味し、技（身体技法）の形成を実感することができる内容づくりが重要になってくる。さらに、他者との対話的实践（対人的実践）においては、仲間との質の高い課題への探求を意味し、共有の学び（平等）とジャンプの学び（質）を基本とする平等と質の同時追及ができる課題づくりが重要になってくる。」*17

岡野・佐藤らが体育における「学びの共同体」の実践と探求で唱える対話的な学びの三つの次元は、三位一体でなければならないと述べられるが、そのことは本研究の筆者たちにとっても首肯できるものである。すでに述べたように、体育について「考え、議論する」こと、岡野らの言葉で言えば、「対話的实践」を導入する際に、「考え、議論する」こと、すなわち対話することの質が大切になってくる。その対話の相手を岡野らの言葉を引いて概説するなら、対象との対話的实践を文化、自己との対話的实践を自己、他者との対話的实践では他者となる。この三つの対話的な学びの次元を道徳の内容項目と照らし合わせると「主として自分自身に関すること」「主として人との関わりに関すること」「主として集団や社会との関わりに関すること」「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」（順番は次期学習指導要領に拠る）と重なっているように思われる。

本研究の筆者たちは、体育と道徳の合科的な学習は、体育と「考え、議論する」道徳との融合として考えてきた。そのような融合はすでに岡野らの体育における「対話的实践」の模索として検証されている。

ここで、私たちが提案する体育と道徳の合科的な学習では、子どもに自己課題を明確化させると同時に、自己評価能力を高めること、そして、一人一人の子どもが「自分のもっている力」を理解し、その力に応じた「現在の力より一步上の適切な課題」をもち、創意・工夫、努力のもと、自発的、自主的に「解決」していく力を身につけることを目指している。そのために「安全面」「技能の系統性」「運動のこつやポイント」「学び方」「仲間づくり」等、発達段階に応じた体育と道徳の合科的な学習の単元計画を作成し、提案している。

体育と道徳の合科的な学習では、運動のイメージをもつこと、よい動きを目指すこと、適切な課題をもつこと、実際に試して体を動かすこと、互いに意見を出し合うこと、動きを見合うこと、声を出して応援したり励まし合ったりすること、記録を綴っていくこと、互いの動きを認め合ったり、勝敗を受け容れたりすることなど1時間の中で、子ども同士が一つ一つの探究的な学びを積み重ねていき、それを次の時間につなげていく。こうした学習活動の積み重ねが、主体的・対話的で深い学びにつながっていく効果が期待できるものと考ええる。さらに、自他のよさや成長と同時に課題を見つけることを通して、自己認識や相互理解を深めることができる。また、その自己との対話、他者との対話のベースになっているのは、自らの身体という文化の担い手である。身体は生活および教育の中で、その身体が棲み込む文化を担い、文化を再生産、または新しく想像していく*18。子どもが目標を目指して、適切な課題を設定して、探究的な学習の流れの学習過程を通して友達との関わりや学び合いを高め、身体という文化財を学んでいくことは言うまでもない。しかし、子どもは仲間・友達との関係において、学習意欲も高揚したり、阻害されたりもする。体育の楽しさや喜びを味わう場面の多くは課題の達成に仲間・友達の励まし、応援、協力が大きく関与していく。

体育の授業で仲間と共に進んで運動し、共に課題を探究することを通してできる喜びや学ぶ楽しさを味わい、積極的に運動に親しむ態度は、体育行政を主導してきた白旗和也も人間性を育む教科として体育は重要な役割を果たし、豊かなスポーツライフに向けた学びの資質や能力になると述べている*19。

本研究の体育と道徳の合科的な学習は、子どもたちが多様な他者とともに協力し対話しながら課題を解決したり、新しいアイデアを出し合ったりすることを経験し、

学びの手ごたえを感じ、より深い学びを探求することができると考えられる。

今後、岡野らが言う「体育における対話的な学びの三つの次元」について体育と道徳の合科的な学習を通してより深く研究を進め、さらに対話的实践、岡野らが言う「体育における対話的な学びの三つの次元」について体育と道徳の合科的な学習を通してより多くの事例の実践を進め、体育と道徳の合科的な学習の実践事例を提案していきたい。

注

- * 1 文部科学省 学校教育法施行規則の一部を改正する省令 小学校学習指導要領・中学校学習指導要領 2017
- * 2 ベネッセ・コーポレーション発行『VIEW21 教育委員会版』2017年1月発行版、2頁 http://berd.benesse.jp/up_images/magazine/VIEW21_kyo_2016_04_all.pdf (2017年8月24日接続確認)
- * 3 この「カリキュラム・マネジメント」の考え方は、合科という形で戦前より実践されてきた一連の革新的学習形態の中に歴史的に位置づけることができるであろう。奈良女子高等師範学校附属小学校で開始された「合科学習」や東京女子高等師範学校附属小学校のプロジェクト・メソッドに基づく「全体教育」は有名である。また、戦後直後には、コア・カリキュラムが試みられ、平成元(1989)年の学習指導要領の改訂では小学校第1・2学年に社会科と理科を統合した生活科が置かれ、またその後の改訂では「総合的な学習」の時間が設置されたように、現在の「カリキュラム・マネジメント」の考え方を歴史的な系譜として見ることもできるが、その詳細について論述することは本稿の課題から大きく外れるために、上記のような歴史的な対応物をいくつか挙げるにとどめておく。
- * 4 このような見解は、加藤幸次『カリキュラム・マネジメントの考え方・進め方』黎明書房、2017の81頁から採った。
- * 5 東京大学教育学部比較教育社会学コースと Benesse 教育研究開発センターが2009年から行った神奈川県内の中学二年生を対象に行った意識調査では、運動部に所属し、活躍しており、また容姿などに自己肯定感をもつ生徒がスクールカーストの上位に来る傾向があることを示している。鈴木翔『教室内カースト』光文社、2012。
- * 6 体育やスポーツを扱った道徳教材一覧 (空欄中のXは、該当教材が管見では見つけられなかったこと、斜線はその内容項目がその学年にないことを表している。)

小学校における体育と道徳の合科的な学習の事例提案

	道徳の内容項目	道徳教材名 () 内は実話・伝記教材の人物		
		小学校1・2年	小学校3・4年	小学校5・6年
A	善悪の判断、自律、自由と責任	X	X	X
	正直、誠実	うみのうんどうかい	ガラスの心	グッドガイ (松井秀喜)
	節度、節制	X	X	自ら可能性を捨てない (松井秀喜) なれなかったりレーの選手
	個性の伸長	X	うれしく思えた日から	勇太への宿題 とぶ道ひとすじ (織田幹雄)
	希望と勇気、努力と強い意志	マラソン大会 なわとび りょうくんといちりん しゃ できるようになったよ さかあがりできたよ	きっとできる (高橋尚子) すきなことから (高橋尚子) テニスのラケット グレンよ走れ (グレン・カニンガム) がんばれ友ちゃん ーりん車にのれた ぼくのへんしん ドッジボール あしたにトライできるようにになりたい (成田まゆみ)	次はクロールだ メジャーリーガー イチロー (イチロー) その日まで、少しでも前向きに生きたい (井上怜奈) 夢 世界に羽ばたく「航平ノート」(内村航平) 今しかできないことをがんばって (吉田沙保里)
	真理の探究			X
B	親切、思いやり	X	心を結ぶ一本のロープ	X
	感謝	ごほうび	X	X
	礼儀	X	X	スポーツを通して
	友情、信頼	X	ドッジボール さとの心 マラソン大会 つなぎ合わせたメダル (西田修平・大江季雄) なみだとえがおの「なでしこジャパン」(なでしこジャパン) 同じ仲間だから ナホとメグ (川澄奈保美・上尾野辺めぐみ)	英子ちゃんとはく 心のレシーブ 陽子とひとみ
相互理解、寛容		X	X	
C	規則の尊重	すべりだい みんなのこうえん みんなのボール たまいれ	X	星野君の二塁打
	公正、公平、社会正義	X	なわとび	アンパイアの心 公平なしんぱん
	勤労、公共の精神	X	X	X
	家族愛、家庭生活の充実	X	X	はじめてのアンカー
	よりよい学校生活、集団生活の充実	X	X	キャプテンとして ハボン・ハボン・ラララ (八重樫茂生)
	伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度	X	X	人間をつくる道 ― 剣道―
	国際理解、国際親善	X	X	ベルーは泣いている (加藤明) ホワイトハウスにできた柔道場 (山下義韶)

D	生命の尊さ	X	朝のマラソン	人間愛の金メダル(キエル兄弟)
	自然愛護	X	X	X
	感動、畏敬の念	X	X	X
	よりよく生きる喜び			X

- * 7 田村学編『カリキュラム・マネジメント入門』東洋館出版、2017、134頁
- * 8 林泰成、白木みどり『人間としての在り方 生き方をどう教えるか』教育出版、2010、131頁
- * 9 川越市立仙波小学校「平成22・23年度 道德教育 研究のあゆみ」2011 川越市立仙波小学校
- * 10 文部科学省『小学校学習指導要領解説 体育編』東洋館出版、2008、9-11頁
- * 11 文部科学省『学校体育実技指導資料第8集』「ゲーム及びボール運動」東洋館出版、2010、43-44頁
- * 12 道德教材「さとしの心」『3年生のどうとく』文溪堂、2007
- * 13 道德教材「さとしの心」指導案
本時のねらい：教材「さとしの心」のさとしの心の変容を考えるを通して、勝負よりも尊いものについて考えを深める。

本時の展開

	学習活動と内容	主な発問と予想される反応	教師の指導と支援
導入	1. 『もうぜったいにあんなチームで試合なんかしたくない。』と思うようなチームについて考える。	○『もうぜったいにあんなチームで試合なんかしたくない。』と思うようなチームとはどんなチームですか。	・個人名を出さないよう配慮する。 ・負けたことが原因になっている場合が多いことに気づかせる。
展開	2. 教材「さとしの心」を読んで、話し合う。 ・さとしがかずやに対して不満をもった理由について ・さとしの心が変わり始めた理由について ・かずやの変容について	○さとしは、かずやのどんなところが不満でしたか。 ・得点を決められないところ。 ・へたなところ。 ・パスを出せないところ。 ○そんな、さとしの気持ちが変わってきたのはなぜですか。 ・かずやが一人で練習している姿を見たから。 ・かずやががんばっていたから。	・試合に負けたことでかずやに不満をもつさとしの心を押さえておく。 ・かずやが一人で練習している姿を見たことが、さとしの心を動かしていることに気づかせる。 ・かずや自身の努力に目を向けさせたい。
	3. さとしの心の変容について深く掘り下げて考える。	○かずやは、これまでと比べてどんなところが変わってきたでしょう。 ・自分から進んで練習しているところ。 ・苦手なことを直そうとしているところ。 ○練習の中で、さとしが変わってきたことはありませんか。 ・かずやに教えるようになったこと。 ・かずやがどうしたらうまくなるか教えられるようになった。 ・かずやのよさに気が付いた。	・技の面と心の面の両面から考えさせる。 ・書いたものをもとにして、話し合わせる。 ・さとしの心が変容した理由について、多様な考えを引き出すように促す。

小学校における体育と道徳の統合的な学習の事例提案

終末	4. 勝っても楽しくない試合や、負けてもよかったと思える試合について考える。	○勝っても楽しくない試合や、負けてもよかったと思える試合はどんな試合でしょう。 ・勝っても、失敗した人を責める試合は楽しくない。 ・負けても、みんなで協力したことがわかる試合は、よかったと思える。	・勝ち負けを超えるものに気付かせたい。
----	--	--	---------------------

- *14 三木四郎『器械運動の動感指導と運動学』明和出版、2015、104-110 頁
 *15 道徳教材「世界に羽ばたく『航平ノート』」『みんなのどくとく6年生』学研みらい、2014
 *16 道徳教材「世界に羽ばたく『航平ノート』」指導案
- 本時のねらい：教材「世界に羽ばたく『航平ノート』」の内村航平の創意工夫や努力について考えることを通して、より高い目標を立て、希望と勇気を持ち、困難があってもくじけずに努力して物事をやり抜こうとする心を育てる。

本時の展開

	学習活動と内容	主な発問と予想される反応	教師の指導と支援
導 入	1. フラッシュカード「もうやめてしまおう。」を見て、話し合う。	○「どうして、こんな気持ちになるのですか。」 ・うまくできないから。 ・いつまでたってもへただから。 ・失敗が続くから。	・なかなか上達しないと、諦めてしまいそうになる自分の姿を見つめさせる。
展 開	2. 教材「世界に羽ばたく『航平ノート』」を読んで、話し合う。 ・体操を継続できた理由について ・練習方法の工夫について ・うまくいなくても、チャレンジし続けられた理由について	○内村航平が、小学生の頃結果が悪くても体操をやり続けられたのはなぜですか。 ・お母さんが励ましてくれたから。 ・お母さんの期待に応えようと思ったから。 ・もっとうまくなりたと思ったから。 ○ノートに絵を描いたり、ピンクパンサーの人形を使ったりしてイメージすることには、どんなよさがありますか。 ・動きがよくわかる。 ・空中の姿勢がイメージできる。 ○トランポリンを使った練習には、どんなよさがありますか。 ・高くはねることができる。 ・空中での時間が長くなる。 ○描いた技がトランポリンを使ってもなかなかできない航平は、なぜチャレンジを続けることができたのでしょうか。 ・目標をもっていったから。 ・だんだんタイミングをつかめてきたから。 ・空中感覚が身についてきたから。	・周囲の励ましと自分の意志の両面から考えるように促す。 ・練習方法の工夫に注目させる。 ・トランポリンの特性を生かした練習をしていることに目を向けさせる。 ・思うように行かないときをどう克服したのかをいろいろな角度から考えさせる。
	3. 内村航平が金メダルをとれる選手にまで成長した理由を班で話し合う。	○内村航平が金メダルをとれる選手にまで成長したのはなぜですか。班で話し合いましょう。 ・高い目標をもって努力したから。 ・練習を工夫したから。 ・他の人がやらないことをやったから。	・話し合うことによって、異なる意見を交流させ、新たな発見をさせたい。 ・話し合った結果を発表させる。

終 末	4. 「世界に羽ばたく『航平ノート』」を読んで、初めて気づいたことや考えたことを書く。	○「世界に羽ばたく『航平ノート』」を読んで、初めて気づいたことや考えたことを書きましょう。 ・内村航平のように、いろいろと工夫して、練習することが大切だとわかった。 ・できなくても、すぐ諦めないことが大切だ。	・書かせることによって、価値の自覚化を図り、授業評価の一助とする。
------------	---	--	-----------------------------------

- *17 岡野昇、山本裕二「第一部第2章 体育における対話的学びのデザイン」、岡野昇、佐藤学編『体育における「学びの共同体」の実践と探求』大修館書店、2015、45-46頁
- *18 佐藤学『学びの身体技法』太郎次郎社、1997がこのよう

な記述の実践的な事例かと思われる。

- *19 白旗和也、「特別講演」第61回全国小学校体育科教育研究集会豊橋大会、2017年8月3日

表1 単元計画（3年 あっちこちタッチタチャダウン）

		Unit1				Unit2				
		1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目（本時）	7時間目	8時間目	
単元目標	【技能】	・相手をかかわりながらボールをもって運んだり、ボールをパスしたりキヤッチしたりすることができる。								
	【態度】	・互いに声をかけながら協力して運動に取り組むことができる。								
めあて	【思考・判断】	・ディフェンスの動きをもとに作戦を考えたり、作戦を成功させるために練習を工夫したりすることができる。								
	【技能】	どのような身のこなしをすれば相手を見えよう。ハンドオフやフェイクを使いながら相手の裏をつく動きを試してみよう。								
学習のねらい	【技能】	ボールが相手に見えないようにしてハンドオフとフェイクをすることができ、ハンドオフ・フェイクを使って、ボールの位置が相手にわからないようにして、相手の陣地に侵入することができる。								
	【関心・意欲・態度】	グループで教え合い、励まし合いながら、協力して運動しようとしている。								
サポートの動き	【思考・判断】	ハンドオフ・フェイクの仕方を工夫することができ、ボールをもたない人は、相手の動きをみて、どこに動けばボールをもっている人を見逃すことができる。								
	【技能】	ボールを隠して誰がボール保持者かわからないようにする。ハンドオフ・フェイクをして相手を入り、相手はブロックする。相手がいない場所に移動する。ボールをもたない人が相手を引きつけ、ボール保持者の進むスペースを確保する。								
学習活動	準備運動	①チームで作戦通り動く練習をする。②ボールをもたない人からディフェンスを離すためにブロックがわかるようにする。③3対2ランゲーム（ブロックあり）で、どんな作戦が有効かを考える。④基本的な技能を高め、有効に使える練習をする。								
	用具・場の準備	①3対2ランゲーム・作戦をもとに相手の裏をつく動きをする。②振り返りを確認する。③作戦通り動く練習をする。④ランゲーム（3対2）で、効果的な練習をしようとする。⑤3対2のランゲーム（ブロックあり）で、効果的な攻撃の仕方を考える。								
学習活動	「まじの心」	①1対1のランゲーム・相手をかかわりながら、効果的なハンドオフ・フェイクができるようにする。②3対2のランゲーム・作戦を立て、効果的な攻撃の仕方を考える。								
	準備運動	①チームで作戦通り動く練習をする。②ボールをもたない人からディフェンスを離すためにブロックがわかるようにする。③3対2ランゲーム（ブロックあり）で、どんな作戦が有効かを考える。④基本的な技能を高め、有効に使える練習をする。								
学習活動	準備運動	①チームで作戦通り動く練習をする。②ボールをもたない人からディフェンスを離すためにブロックがわかるようにする。③3対2ランゲーム（ブロックあり）で、どんな作戦が有効かを考える。④基本的な技能を高め、有効に使える練習をする。								
	用具・場の準備	①3対2ランゲーム・作戦をもとに相手の裏をつく動きをする。②振り返りを確認する。③作戦通り動く練習をする。④ランゲーム（3対2）で、効果的な練習をしようとする。⑤3対2のランゲーム（ブロックあり）で、効果的な攻撃の仕方を考える。								

振り返り・用具の片づけ

表2 単元計画 (6年 首はね跳び)

	1 時間目	2 時間目	3 時間目	4 時間目	5 時間目	6 時間目 (本時)	7 時間目	
単元目標	<p>【技 能】・回転技の例示にある、「大きな台上前転」の発展技である頭はね跳びの「はね動作」を行うことができる。</p> <p>【態度】・運動に進んで取り組み、約束を守り助け合って運動したり、場や器械・器具の安全に気を配ったりすることができる。</p> <p>【思考・判断】・自己の能力に適した課題の解決の仕方がわかる。</p>							
めあて	補助をつけて台上前転を大きくすくすくするこつをアドバイスしよう。	補助で膝の伸びをアドバイスしよう。	補助で跳ねるときポイントを探ろう。	自分なりの跳ねるポイントを見つけよう。	跳ねる瞬間を補助がアシストしよう。	跳ねるタイムイングを補助がアドバイスしよう。	自分たちの跳ねを紹介しよう。	
学習のねらい	台上前転との比較から大きな台上前転では高く腰を上げたり、膝を伸ばしたりすることから、膝を伸ばしたことを理解すること。	大きな台上前転の技の特徴を理解し、膝を伸ばしたり、体をくの字で大きく回つたりすることを理解すること。	大きな台上前転と頭はね跳びでは、着手から第2空中局面が大きく違うことを理解すること。	自分なりの跳ねるポイントを見出すために、自らの課題にあった場所で練習し、跳ねる感覚を身につける。	跳ねるタイムイングを自分なりに見つけることができる。	跳ねるためには、腰角を一気に広げ、腕で体を押し上げながら体を反る感覚を身につける。	自分たちの跳ねを発表する。	
運動補助の動き	台上から落ちないように補助をする。膝が伸びているか確認しアドバイスする。	どこで膝を伸ばすのかを運動者にアドバイスする。	いつでもどこに足を蹴り出せばいいかアドバイスする。	運動者の課題にあった場所を選ぶことができる。跳ねる感じをつかませる。腰角を開くタイムイングをアドバイスする。手の押し上げができていない場合は、どのように手を上げればよいかアドバイスする。				
学習活動	<p>①基礎感覚づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> かえるの足うち 踏み切り跳び越え 膝伸ばしゆりかご ゴム越え膝伸ばし前転の四つの運動を順番に行い、基礎感覚を身につけさせる。 <p>②台上前転</p> <ul style="list-style-type: none"> 踏み切り、着手までの基礎的な動きを確認する。 <p>③膝伸ばし台上前転</p> <ul style="list-style-type: none"> こつをアドバイスする。 	<p>①基礎感覚づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> かえるの足うち 踏み切り跳び越え 膝伸ばしゆりかご ゴム越え膝伸ばし前転の四つの運動を順番に行い、基礎感覚を身につけさせる。 <p>②台上前転</p> <ul style="list-style-type: none"> 踏み切り、着手までの基礎的な動きを確認する。 <p>③膝伸ばし台上前転</p> <ul style="list-style-type: none"> こつをアドバイスする。 	<p>①首はね跳びにつながらる感覚づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 膝伸ばしゆりかごから長座 膝伸ばしゆりかごからブリッジ 三点倒立ちからブリッジ 三つの運動を順番に行い、頭はね跳びにつながらる感覚を身につけさせる。 <p>②セーフティーマット上で三点倒立ちからブリッジして着地する。補助者が必ず向かい合って、運動者の腰をもつて補助をする。</p>	<p>①首はね跳びにつながらる感覚づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 膝伸ばしゆりかごから長座 膝伸ばしゆりかごからブリッジ 三点倒立ちからブリッジ 三つの運動を順番に行い、頭はね跳びにつながらる感覚を身につけさせる。 <p>②この共有する。運動補助者と話し合っ課題を確認する。</p>	<p>①首はね跳びにつながらる感覚づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 膝伸ばしゆりかごから長座 膝伸ばしゆりかごからブリッジ 三点倒立ちからブリッジ 三つの運動を順番に行い、頭はね跳びにつながらる感覚を身につけさせる。 <p>②この共有する。運動補助者と話し合っ課題を確認する。</p>	<p>①首はね跳びにつながらる感覚づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 膝伸ばしゆりかごから長座 膝伸ばしゆりかごからブリッジ 三点倒立ちからブリッジ 三つの運動を順番に行い、頭はね跳びにつながらる感覚を身につけさせる。 <p>②この共有する。運動補助者と話し合っ課題を確認する。</p>	<p>①首はね跳びにつながらる感覚づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 膝伸ばしゆりかごから長座 膝伸ばしゆりかごからブリッジ 三点倒立ちからブリッジ 三つの運動を順番に行い、頭はね跳びにつながらる感覚を身につけさせる。 <p>②この共有する。運動補助者と話し合っ課題を確認する。</p>	<p>①首はね跳びにつながらる感覚づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 膝伸ばしゆりかごから長座 膝伸ばしゆりかごからブリッジ 三点倒立ちからブリッジ 三つの運動を順番に行い、頭はね跳びにつながらる感覚を身につけさせる。 <p>②この共有する。運動補助者と話し合っ課題を確認する。</p>
	<p>用具・場の準備 準備運動</p> <h2 style="text-align: center;">「世界に羽ばたく航平ノート」</h2>							
	<p>振り回り・用具の片づけ</p>							

Case Studies Proposal of the Unified Classes of Physical Education and Morality in Elementary School

: According to the Idea of 'Curriculum Management' brought
in the Renewal of Japanese 'Course of Study'

Koichi Hyotani* Yoshimasa Fujita* Tsuyoshi Nishioka** Yosuke Hirota***

* *Osaka University of Comprehensive Children Education*

** *Ikeda Elementary School attached to Osaka Kyoiku University*

*** *Graduate School of Fukuyama City University*

By the renewal of Japanese 'Course of Study (teaching guidelines)' in Elementary School announced in 2017, each Elementary School should be demanded to actualize the 'Curriculum Management'. It includes the circulation of the improvement, the enhancement and the evaluation of school education, which are rooted in the characteristics of each school and district. In this new trend we make the concrete unit teaching plans based on the idea of new 'Curriculum Management' and propose two cases studies to connect the children's bodies and minds by unified classes of physical education and morality. As a first example, we make the plan to unify group ball game with reading of a moral textbook so that children don't only enjoy to play ball game but also learn the value of teamwork and care mind to other children. The aim of the first example is the cultivation of the children's thoughts and techniques according to the their own positions and characteristics. The second one is to suggest the connection of physical movements and moral readings by which children require dialogue with other members. The children as the player and the one as the peer observer of Gymnastic Motions discuss the movements of the player in order to improve the communicational skill to peers as well as the personal gymnastic one. Through creating and considering of these two cases, we compose the class practices (Class of Learning by Dialogue) that connect physical education and morality from the dual perspectives. Thus the purpose of this paper is to make these proposals to promote deep learning of children and to create practice of learning based on dialgue to connect the link between mind and body from the context of the today's discussion of 'Curriculum Management'.

Key words : Course of Study in Elementary School, Curriculum Management, Unified Classes of Physical Education and Morality, Class of Learning by Dialogue, the Peer Observation of Gymnastic Motions